

2023年7月23日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「見よ、わたしはあなたと共にいる」

聖書：創世記28：10～22

ヤコブは、ベエル・シェバからハラシマまで旅をする。その距離800キロ。それも追手から逃げるようにして家を飛び出して来た逃避行であった。兄をだまし、兄が受けるべき「祝福」を横取りしたのである。この世のしきたりで言うところの長男への「祝福」を、双子の弟ヤコブが奪うのであった。奪われた兄の怒りから逃げるように、弟ヤコブの旅がここにある。

兄エサウの怒りは、弟を殺してしまいたいと叫ぶほどに怒りをあらわにした。このままでは、兄に殺されてしまう恐れがあったため、母リベカは、兄の怒りが治まるまで、自分の兄ラバンのいるハラシマという町へ逃れて、しばらくそこに滞在することをうながす。ヤコブのこのときの心境はどうあったか。長旅と心休まらない状況の中で心身共に疲れ果てていたに違いない。そして寝る場所もまた、常に野宿を強いられていた。どんなに寂しく、不安と絶望の中にあったことか。

この日も、周りには何にもない荒れ野において、石を枕にして眠りについた。ヤコブはこの日、夢を見る。その夢は、地面から天に向かって階段が伸びていた。その階段の一番上は雲の上まで伸びている。あんなに離れている“地面と天が繋がれている”…そして天使たちが上ったり下ったりしていた。すると、主がかたわらに立って言われた。「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、…決して見捨てない」（15節）と。夢から覚めたヤコブは、何もないと思っていた荒れ野で神様の声を聴いたのである。兄エサウに殺されそうになって逃げている自分にとって、今ほど天が遠いと感じることがない状況の中で、天と地が繋がれているということを見せられて、どんなに慰めを受け、励ましを受けたことか。

ここで大事なことは、ヤコブが夢から覚めた時、「何だ、夢か」とは言わなかったことにある。夢に現れた神の言葉を、神の声として聞いていった。信仰とは、神の語りかけを信じて生きていくことにある。私たちの周りには、多くの不条理な世界がはびこっている。どのような状況の中にあっても、神の言葉に耳を傾けていくことが、私たちの信仰であり、大事なこと。さらにもう一つ大事なことは、ヤコブは夢を見た後、「ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立て、先端に油をそそいで、その場所をベテル（神の家）と名付けた」（18節）。このことは、神の恵みを受けて感謝の礼拝を捧げたということである。神を覚え、礼拝を捧げることは私たちの信仰を高めてくださることに繋がる。（神谷）